



## Shakespeare以前の劇作家 : Christopher Marloweの場合

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡部, 一雄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00000552">https://doi.org/10.32150/00000552</a>

## Shakespeare 以前の劇作家

Christopher Marlowe の場合

渡 部 一 雄

北海道学芸大学釧路分校外語研究室

Kazuo WATANABE : Pre-Shakespearean Tragical Dramatists.  
—On Christopher Marlowe—

## 序 説

Allardyce Nicoll が “British Drama” に於て、Marlowe は Shakespeare 以前の劇作家の中で最も才能のある人物だと賞讃している<sup>1)</sup>。

T. S. Eliot も又、Marlowe は此の時代に現われた劇作家の中で、Chapman よりも、Shakespeare よりも、誰よりも思索し、誰よりも哲学的な精神の持主であつたと言い<sup>2)</sup>、更に又、“John Ford 論”の中で、Elizabeth 女王及び James I 世時代の劇作家を三大別し、其の第一区分の筆頭に Marlowe を推挙している<sup>3)</sup>。

一方、Swinburne も又、Marlowe は英国悲劇の父であり、英国 Blank Verse の creator であると讃美し、Marlowe は、兎に角、Shakespeare の教師であり guide であると迄言及している。

此の中の Blank Verse に就いて言えば、O. Jespersen 迄が“韻律論”の中で、Chaucer が Iambic pentameter を押韻した詩形を、即ち heroic line を用いて以来、特に又、Marlowe が無韻の詩形で、即ち Blank Verse で之を広めて以来、Shakespeare, Milton, Dryden, Pope, Thomson, Cowper, Wordsworth, Byron, Shelley, Tennyson 或は、Lessing, Goethe, Schiller ならびに、多数の Scandinavia の詩人達が彼等の最も重要な作品の多くの中にこれを使用して来たと言っている<sup>4)</sup>。

此の様に賞讃される Marlowe とは、周知の如く、1564年2月6日、Canterbury に生れ、14才にして既に詩作し<sup>5)</sup>、其の後大学在学時代の21才、或は22才に於て<sup>6)</sup>、不朽の名作 “Tamburlaine The Great” を創作したのを手始めとし、“The Tragedy of Dr. Faustus,” “The Jew of Malta,” “Edward II” 等々の傑作を創作した人物である。1592年5月、London に於て、疫病が蔓延したので、Deptford に赴き、同所にて、同年5月末に、Francis Fretcher なる者の為に殺害されている。然し、上記の作品の他に彼が協力したであろうと考察される作品の中に、Thomas Kyd 作 “Arden of Feversham”<sup>7)</sup> 或は又、Shakespeare 作 “Titus Andronicus,” “Henry VI” 等がある。即ち、彼は僅か7年足らずにして一躍 Shakespeare の父と迄言われ、30才にして世を去つたのである。上記の如き見解に基き、Marlowe は Shakespeare 以前の悲劇作家として第一人者であるという説を前提として論を先ず進めた。第一に、如何なる基礎に基ずいて彼が “Tamburlaine The Great” を創作したかという事を考察した。其の為には彼の思想・性格・哲学的精神を中心として、当時の大学の内容、Renaissance との関係、更に又時代的背景、特に、封建貴族との関係、

Puritanism との関係为主题とした。第二に、彼が、“Tamburlaine The Great”の頭首に附随せしめた Prologue を通じ、同時代の劇作家は勿論の事、英国劇壇に発した一大宣言の真の意義と、其の解明に努め、Marlowe が Shakespeare 以前の劇作家の第一人者であると言われる特質を敢て摘発した。此の論述を、其の周辺、特に、Thomas Kyd 作 “The Spanish Tragedy” と関連せしめ、Marlowe の悲劇作家としての位置を再決定しようとしたのである。此の考察は Blank Verse と劇的構成法に要約され得るものであつて、彼自身其の Prologue を以て宣言した如く、彼の作品が真実英国悲劇の亀鑑たり得るか否かという問題に落着した。此の考察の結論は、前記諸学者が述べるが如き Marlowe に対する見解は、此の様な論拠に依ると朱筆が必要だという事に到達する、彼の悲劇構成法に就いては専ら割愛し、次回に述べる事にした。

## 1

F. S. Boas 教授は「Marlowe は “Tamburlaine The Great” の第一部を既に Corpus Christi に在学中執筆していたと推察される。」と述べておられるが<sup>8)</sup> 此の事に就いては容易に考察され得る事だと思われる。何故なら、1987年、即ち彼が23才の時に、既に、此の劇が上演されていたという歴史的証拠が残されている。故に、それ以前、即ち彼の在学中に書いた事は明白である。此の着手時期に就いては後述するとして、如何なる性格、思想の持主が、如何なる動機で此の作品を執筆したかという問題を考察してみる。

先ず Boas 教授の言われる Corpus Christi を中心として論を展開する。此れは Corpus Christi College であつて、Cambridge 大学の一学寮、Marlowe が此の大学に入学許可されたのは1581年3月、彼の名は Marlin として記入されている<sup>9)</sup>。此の大学が想像以上に厳格で、且つ又、禁慾的生活を強いていた。校規を犯すと体刑を与えるが如き、中世の禁慾僧の如き生活が其処では要求されていた。彼は此の様な生活に反感を抱き、益々自由思想を体得したと考えられる。幼年期から演劇に対する鑑賞力を体得していた彼は、此の大学に入学以来、Greek や、Latin の作品の多くに接し、以後、此の思想を中心として劇作している事は彼の作品から容易に判断出来るものである。換言すれば、此の様な自由思想が彼の精神の中に潜在していたからこそ30年以上に亘る大衆の支持が与えられた作品を完成し得たのである。

当時、劇作家が大衆の支持を得んと志すならば、Oxford や Cambridge で修得した古典的教訓を全部無視しなければならなかつたと言つても過言ではない<sup>10)</sup>。此の様な自由思想以外に彼の性格として挙げられるものは、高慢、勝気、自己吹聴等であろう。然し非凡な才能の持主であつた事は何人も疑う余地がない。

周知の如き Gabriel Harvey の Marlowe に対する発言 (1593年9月)、或は又、Thomas Beard なる者が “The Theatre of God’s Judgements” を通じて Marlowe に就いて為した公言 (1597年)、其の他、Francis Meres, William Vaughan 等の公言によつて我々は凡 Marlowe が如何なる性格の持主であつたかを知り得る。然し、彼等が Marlowe を汚辱の中で葬り去らんとした企によるものだと一応考えたとしても、依然として彼の作品の中に滲透している一貫した精神に対しては如何とも為し難い。勝気な性格、高慢な性格が敵をより多く作り出した事は事実だつたと考えられる。其の非凡な才能の持主だつたという事に就いては、数多の作品と Sir Francis Walsingham に学生時代に見い出されたという事実だけでも容易に我々をして再確認せしめる。

彼の作品に滲透している一貫した精神とは、「無限の彼方にあるもの、達し得ないもの、可能に見放されたもの、極端なもの、そうしたものに対する熾烈なる願望<sup>11)</sup>」をも含有している。

次に一貫した此の精神の通過する過程を究明すると、其処に若干の沈滞期が存在する事に気付

く、例えば、Tamburlaine の中に表明されている aspiration の中間に暫しの休止の状態がある。其れは自己の不断の向上心に疲れをおぼえるのか、其の働く方向に対する一種の疑惑・疑念から生ずる良心の呵責から端を発するのか、兎に角、其の過程に一貫性が無い事を見逃すわけにはゆかない。

My soul begins to take her flight to hell,  
and summons all my senses to depart.<sup>12)</sup>

(Tamb. I. II. v.ii. 44-45)

或は又、“Dr. Faustus”<sup>13)</sup> に於て Faustus は、

Valdes, as resolute am I in this  
As thou to live ; therefore object it not.

(Dr. Faus. I. 131-132)

これと同様な事を数度口に出しておきながら、

Why waver'st thou? O, something soundeth  
in mine ears,

'Abjure this magic, turn to God again !'

Aye, and Faustus will turn to God again.

(Dr. Faustus. V. 7-10)

と言つている。即ち彼の aspiration の中には反省、沈滞、疑惑、疑念という要素が常に存在していて、これが“The Spanish Tragedy”の Hieronimo に於ける、或は又 Shakespeare の“Hamlet”に於ける復讐の遷延回避と共通するものがある。此れと同時に、彼自身の aspiration は無反省なものではないとも言い得る。

次に自己吹聴の性格の持主だと推定され得る根拠に就いては、Kyd が Marlowe の死後、Sir John Puckering 宛に提出した上訴文、特に二回目のそれが主題の対照となり得る<sup>15)</sup>。然し、Tamburlaine の Prologue なるものが、此の場合、より以上の効果がある事勿論である。此の上訴文の中で Kyd が Marlowe の事を評するに「無神論者」或は又「反政府的危険人物」なる言語を以てしている。此の無神論・反政府なる意味は夫々「神を信じない」或は又「政府に反対」という意味よりは寧ろ自己吹聴の高慢な性格に対する悪感情の一表現であつたろうと考えられるからだ。同室の Kyd に Marlowe が若輩にも拘らず圧迫感を与えていた事だけは容易に理解出来る。彼は Kyd のみならず何人にも此の様な性格を公然と示していたのである。

此の様に、自由思想者にして勝気の Marlowe が前述した中世的禁慾的学寮の中で、而も、7年もの長期間に互つて其の個性を隠し覆せるものではない、何時しか表面に出、或は又、出したであろう。即ち、彼は其の様な寮生活の中に於ける自由主義であり、自己の所信は飽く迄保持し、他人に吹聴したと想像される。此の自由思想探求の心は彼をして Plato 主義よりは寧ろ Aristotle 主義の方向に向わしめた。Spencer が Cambridge に入学した頃 (1569)、或は Renascence 頭初から Cambridge では Plato 主義を学生に教授し、Aristotle 主義を採用する Oxford と対立していた<sup>15)</sup>。Marlowe は Cambridge に在籍していた故 Plato 主義者たるべき所、作品に表われている彼は Aristotle 主義に根底から影響されている。即ち、彼は Plato の二元論に対して、一元論を立て、Idea を事物の普遍の本質とし、其の哲学的思索は飽く迄経験的現実即して行動すべきだという Aristotle の所信に共鳴したものと考えられる。更に彼が共鳴した事項は Aristotle の「自然的真実性の協力<sup>16)</sup>」にあると思われる。彼が Aristotle 主義に共鳴しているという事は数多く挙げ得るが、今一例を挙げると、次の如き個所である。

*Faustus* Settle thy studies, Faustus, and begin  
Hauing Commenc'd, be a divine in show,  
Yet level at the end of every art,  
And live and die in Aristotle's works.

(Dr. Faustus. I. i. 1-5)

次に、前述した無神論に就いて考えると、先ず、Marlowe は寺院の奨学金を受けて大学教育を受けていたので、当然、神学者に為るべき者であつた。然し此処で Kyd の上訴文の中の「無神論」と言う言葉を度外視したとしても、彼の作品に於て“神”或は又“運命”というものは余り重要な位置をしめていない事は明白な事実である。否、寧ろ、大胆に僧侶を諷して次の如く言っている。

Ringing with joy their superstitious bells.

(Tamb. Act. V. Sc. i)

更に、又、

In vain, I see, men worship Mahomet ;  
My sword hath sent millions of Turks to hell,  
Slew all his priests, his kinsmen and his friends,  
And yet I live untouched by Mahomet.  
There is a God, full of revenging wrath,  
From whom the thunder and the lightning breaks,  
Whose scourge I am, and him will I obey.  
So, Casane ; fling them in the fire.

(They burn the books.)

Now, Mahomet, if thou have any power,  
Come down thyself and work a miracle.  
Thou art not worthy to be worshipped  
That suffers flames of fire to burn the writ  
Wherein the sum of thy religion rests.

(Tamb. II. V. I. 178-190)

Tamburlaine 自身 “God out of heaven”<sup>17)</sup> として登場している。さて、Marlowe が神に対して如何なる考えを抱いていたかは “Tamburlaine The Great” I. II. VII. 18-26 を引用すると更に明白になると思う。此処では省略する。此の神という問題の根本は前述した Aristotle 主義の中に存在する。即ち、中世の生物学では人間は4つの液、血液、粘液、胆汁、黒胆汁から定まると言う考え方に立脚しており、彼はその element なる語を Tamburlaine の中にも Dr. Faustus の中にも再度使用している。然し、彼は此の element を地・水・火・風の4大元素と為し、其中、地を最大の element としている (Tamb. I. II. VII. 30-33. Iii 235 参照)。故に Marlowe は Machiavellie の 影響を受け無神論者、不道徳、墮落的思想云々<sup>18)</sup> と一応非難されるが、彼は「人間は神によつて創造されたものではなく、互いに dispute する4つの element から成立している」という根本的思索の上に立つており、更に、現代人の考えるが如き無神論という言葉では理解不可能である様に思われる。即ち、当時の無神論なる用語に対する解釈は現代のそれとは若干趣を異にしているからだ。Elizabeth 朝の Atheism とは神の存在を否定せず、たゞ、其の最高位を否定している人間を意味していたからである。“The Tamburlaine The Great” に於ても、Tamburlaine は神を否定はしていない事を各個所で発見出来る。それ故 God of heaven という

用語が生れ出たのだ。更に Kyd と同様 Virgil の影響を受けて (Aen., VI 548 ff) 地獄をも否定してはいない。最愛の妻が死亡した時に、

“And throw them in the triple moat of hell”

(Tamb. II. II. IV 100)

と言っている。極言すると、神に礼拝するのではなく、人間に礼拝すべし、と言うが如き考えが根本に存在している。更に、Aristotle 主義が全部を支配しているのではなく、其の一部、例えば、Tamburlaine の肉体は自分自身の image であるというが如き Platon 的思考方を持つているという事をも又見逃せ得ない事であり、且つ又、端を Aristotle 主義に発した生物学、或は、天文学的知識は充分豊富であつたとは断言出来ない。

然し此の様な事柄は枝葉の存在であつて、英国悲劇全体を一大飛躍せしめた点は、其れ迄の悲劇では神が悪人を罰したのであるが、Marlowe に於て、始めて、人間自身が悪人を罰したという事実に存在する。即ち、罰する者が Protagonist の外部に設定されていたが、彼は之を人間内部に設定したのである。悲劇の根本は、それ迄、The fickleness of Fortune<sup>19)</sup> にあつたが、彼は Protagonist の will, 更に其処から迸る action に重点を置いたと言ひ得る。此の様な手段を使用する事によつて彼は完全に Morality を脱皮しようと試みた。即ち、最終的には神の慈悲に依る因果応報を、例えば “Spanish Tragedy” の如く天国あり地獄あり、revenge の際には神だのみする様な構想を “such conceits as clownage keeps in pay”<sup>20)</sup> と称して新しい分野を開拓せんと試みたのである。

2

Marlowe の Cambridge 時代、特に、“The Tamburlaine The Great” 執筆前後の外的事象、即ち、彼を取り巻く事象と彼とを関連せしめて考察してみる。其の時代的背景とは実に複雑である。第一に Renascence と彼の問題であるが、周知の如く Renascence の根源は humanism にある。即ち、過去の枠から解放された自由思想の探求にある。前述した如く、彼は Cambridge 在学時代から既に彼独自の分野を開拓していた事は事実である。更に神に対する概念を此処に導入して言及出来る事は、Tamburlaine も Dr. Faustus も、彼の作品全体が個人の責任に基づく道徳劇であるという事である。即ち、Tamburlaine は自分自身何人にも強いられず、

For Tamburlaine, the scourge of God, must die.

(Tamb. II. V. iii 248)

と此の世に言い残して死んでゆくし、Dr. Faustus の場合に於ても Chorus の口を通じて、

Faustus is gone ; regard his hellish fall,  
Whose fiendful fortune may exhort the wise.

(Dr. Faust. X. IV. 123-124)

と言っている。個人の責任である。悪行の代償は死である事を自ら自覚している。然し “Spanish Tragedy” の最後の scene を引用してみると、

Now will I beg at lovely Proserpine,  
That, by the vertue of her Princely doome,  
I may consort my freends in pleasing sort,  
And on my foes worke iust and sharp reuenge.

(Sp. Trag. IV. v. 13-16)

即ち、今死亡せる者共を地獄の女王に懇願して正当に裁判し、其の様な手段に依つて復讐する、

換言すると悪人を罰するというのである。地獄の王ではあるが既に神と云う第三者の介在物が存在している。更に又我が子 Horatio の殺害された現場に接した母親 Isabella は苦悶に苦悶を重ねた後に、

The heauens are iust, murder cannot be hid ;  
Time is the author both of truth and right,  
And time will bring this trecherie to light.

(Sp. Trag. 58-60) 21)

と言っている。悪人に対して復讐出来なくとも、天が、神が裁いてくれるというのである。

これと比較した時、如何に Marlowe が人間中心であつたか、人間尊重の精神を強く保持していたかという事が容易に理解出来るのである。尊重すればこそ生前の悪徳に対する責めは総て自分が負うという結果となる。

次に英国 Renaissance の軍事的、外交的、政治的多角形なる活動状態と彼の作品との間に一大関連がある事を見逃すわけには行かない。彼の back-bones の一つは実践的、行動的要素である。これは前述した Aristotle 主義から出発している事は勿論である。Marlowe は行動の文学が劇という形体をとり、其の劇は悲劇となり、其の中に表れる action は “high astounding terms”<sup>22)</sup>、烈しい passion、過去の演劇に見られるものよりも更に一層強い身振り、或は又、声の昂揚等々に依る精力的運動であると考えた。抑々 Marlowe の文学史上に於ける特色の一つに此の中の “high astounding terms” が挙げられる程、terms に留意している。大刷新を試みたのである。その為には今迄の様な Blank Verse では弱体であると考え、結局 “From jiggging veins of riming mother wits……” と宣言せざるを得なくなつた次第である。

第二に、貴族と Marlowe との関係である。

1987年5月、彼は M. A. 授与の予定者の中に加わっていたが不許可を申し渡された。其の理由は無断外泊の為である。然し、直後、Elizabeth 女王の署名入りの公文書<sup>23)</sup>を以て、天降り式に学長宛に授与する様指示された。此の事実は学生時代に於ける彼の優秀性と、政治面に於ける彼の活躍の程度を明白に示す。更に如何に偉大なる力を以て Marlowe と政府とが結合されていたかをも充分物語っている。

Marlowe の学生時代、政府傭員として活躍していた時期は1585年より1586年迄であると考えられる。其の理由は Cambridge の学生授業料名簿中此の期間が空白となつている事実に基くものである。此の時期以外には何処にも考えられる個所が無い。此の時に彼の patron, Sir. Francis Walsingham と密接なる関係を保持し、其の patron の suggestion のもとに彼が “Tamburlaine The Great” を創作したと推察される。抑々、此の作品は Marlowe が彼の patron, Sir Francis Walsingham に献呈する事を目的として書かれたものである。此の頃の劇作家達は、一般に、自分の patron の為に多くの作品を書き上げた事は明白な事実である。故に、創作された Drama の Backbone は劇作家の側にあるよりは寧ろ其の patron 側にあつたと言っても過言ではない。例えば Shakespeare 作 “Julius Ceaser” の Diktator に対する共和主義者達の反対は、Elizabeth 女王に対する彼の patron, Essex, Southampton の態度を Rome の昔に仮定して、両卿の政治的失脚の直前に、Shakespeare に suggestion して書かせたものである。又、Spenser も Raleigh 卿を patron とし、“Faerie Queene” を女王に献じている。当時の patron とは此等劇作家と密接な関係にあり、且つ又、同時代の演劇という文化を育成したものは、此の Sir. F. Walsingham の様な封建貴族であつた事は理解する過程に於て重大な役割を持つている。封建貴族とは Elizabeth 女王及び王廷貴族に対する所謂「貴族反対派」を意味する。Shakespeare の patron 達も此等封建

貴族の一員である。周知の如く、此の封建貴族達は、長期に亙る伝統を持続して来た彼等の舞台から退場を余儀なくされていた。其の理由は、商業的・工業的市民の抬頭と Elizabeth 朝が執つた中央集権主義・重商主義政策との間に挿まれたからである<sup>24)</sup>。

Marlowe の patron, Sir. Francis Walsingham と Elizabeth 女王との関係は、例えば、Spenser の patron, Grey 卿と Elizabeth 女王との関係を比較すると容易に理解可能であろう。女王は実は Grey 卿を充分信頼しておらず、彼も又女王の政策に飽き足らなかつた。<sup>25)</sup>表面 Elizabeth 女王は躍進の一途を辿っていたかの様に見えるが、其の裏、Marlowe の学生時代、女王は政治的的重大危機に直面し、其の王座自体が既に揺ぎ出していたのである。理由は女王自身の性格と、加うるに、無力とは言え Scotland の Mary が野心を抱きつゝ、生存していたからである。各地方に於ける Mary の Catholic の同盟者達が Protestant Elizabeth に対して陰謀を計画していた事は周知の通りである。其の究極の目的は廢位にあつた事は勿論である。

此の陰謀をめぐつて Elizabeth 女王と Mary との両方の側から多量の spy が出された事は言う迄もない。Marlowe の patron, Sir. Francis Walsingham なる人物は、実は、此の Elizabeth 女王側の spy 団の団長であつた<sup>26)</sup>。一応外面的に、彼の職名は Secretary of State, honourable member of the Privy Council とはなつているが、

Elizabeth 女王は公衆の目前で Mary 側の spy を大量殺戮し、最後には、Mary を処刑した。此の年1587年に初めて Tamburlaine The Great が上演されている事に注目しなければならない。海外に於ては Spain の Armada 艦隊を撃滅し、数年前英国が海外で行つた残虐行為を代表するグレマルアの惨劇、スメルウィックの虐殺事件も又重大なる意義を有している事に気付くべきである。

“Tamburlaine The Great” を始めとする Marlowe の作品と、以上の如き外的条件とを比較検討した時、必然的に我々は或る共通点を発見する。即ち、Tamburlaine が自己野望達成の為に他国民を虐殺する scene である。疫病も加担したとは言え英国政府の苛酷な政策の為 Ireland 全土は将に荒廢の危機に直面したのである。此の様な政策が過度にわたつたので、英政府の一部の者は Ireland 総督を英国本土に呼び戻した事実があつたが、其の中に Sir. Francis Walsingham が加わつていたと推察される。既に此の頃から前記封建貴族である同卿は、英国の此の徹底的な弾圧方針に対して疑問を抱いていたのだ。故に、極言すると、Marlowe が Tamburlaine The Great の構想を練る以前に、既に、其れは彼の patron の頭中に存在していたのである。前述した如く、Marlowe の学生時代に同卿の配下となり Elizabeth 側の spy となつていたのであるから、彼等二人は、文学的媒介物を通じて、想像以上の親交があつたと容易に考察される。即ち此の間、Shakespeare の patron が彼に Suggestion したと同様に同卿も又彼に自己の考えを有形・無形の形で伝授したのである。Marlowe は彼の政治的意志を基礎にして創作したのだ。此の論究を“Edward II”に迄及ぼすと、容易に其の異色が頷ける。“Edward II”創作の頃の彼は精神的円熟期に入つたと言うよりは寧ろ独立独歩 patron の禁足から離脱し、真に自己の才能を伸し得た時期であると言える。此の様な見解に基くと、Marlowe の作品は Elizabeth 女王に対してのみならず、英国政策に対する一つの教訓劇であるとも言える。

Marlowe の作品中に patron の政治的意企が介在していると述べたが、更に其の政治的意企に就いて吟味してみる。勿論前述した如き Elizabeth 女王或は英政府内の諸卿の執つた手段方法に対する反対意志も重要な要素ではあるが、見逃す事が出来ないのは封建貴族としての意志である。即ち、漸時高まりつゝある中央集権化の強力な作用に対する抵抗意志と、puritan 的市民の保持している禁慾主義に反対せんとする意志である。此等の意志が Marlowe の意志と共鳴して、文学とい



う形体をとり有形化されたのである。然し、今述べた如く、Marlowe にとっては此の patron の存在が有利であつたか否かについては疑問がある。此の様な patron の存在其れ自体が Marlowe をして禁足という彼の才能を自由に申し得ない世界に追い込んだのかも知れない。“Edward II”を創作していた頃、彼は The Earl of Pembroke で theatrical patron を求めていた事は事実である<sup>27)</sup>。

第三に、此の puritanism に就いて検討してみる。此の頃の演劇を主題としている以上、此の問題を切り離して考察する事は不可能だという見解に基くものである。puritan という言葉は、既に Elizabeth 時代の初期に使用されている。此の頃、教会に於ける慣習上教会で purify された人々は皆 puritan と呼ばれた。puritan と nonconformity と混同して考える事は大きな誤謬である。Catholic 教の制度、或は儀式を極度に避けようとして英国々教内に起したのであるが、多くの人人は完全に purify された身体・精神を得る事が出来ず、その purify とは抑々如何なるものかと其の追求に苦しんだ。修道院制度、或は国民の生活が衰頹している時、彼等は自己の信心の深さに欠けている事に気付いた。その結果、精神的に強烈な、且つ又感受性に富んだ多くの人々は此の puritan を或る種の重要な inspiration にすり変えてしまつた。此の様にして彼等は道徳的熱情及び目標に邁進する強粘性を体得し、其の体得したものを以て何か根本的原理というものを狂気の様に追求し、其の結果、彼等は仮想敵を作り上げ、それと戦い、抵抗する事によつて自己の中に光明を見い出さんとしたのである。

Elizabeth 朝初期に於ても purify を希望した人々は一般大衆であり、特に職人階級から出た人人が多かつた。彼等は内部生活、家庭生活の充実度を増す事によつて教会を purify 出来ると信じた。此等強固な市民が London を中心として住居を構え、他の地方を完全に lead していた。

此の様な状態にあつて、Elizabeth 女王或は又宮廷人達が演劇の擁護者であつても、此の puritan の共鳴者達、即ち既に資本家となり市民の主要な人物の大多数の者達は店員等を逸楽遊蕩の風に染ませる事を拒否し、結果として London 市内に公開劇場を設立する事に反対し、周知の如く 1576 年英国最初の公衆劇場を London 市内ではなく郊外の Finsbury Fields に設立させたのである。

何故 puritan が Drama を斯くの如く排斥したかに就いて詮索してみる。其の根本は、puritan が罪に対する過剰な迄の意識というものを保持している所に存在する様に思われる。“adulterous dreams”<sup>28)</sup>する事ですら非難の対象とした程である。完全なまで日々の生活は禁慾的生活である。此処で我々は Marlowe が大学時代強いられていた禁慾的生活に抵抗を感じていた事を思い出さなければならない。puritan の信者にとつて dance は人々をして悪徳に続く道に導入し、敬神の念を失わせるものとした。根本的に考え方が此の様なものであるから、演劇に対しても此れ以上に若者の柔軟な精神に邪悪邪淫な火を点ずるものは無いと考え、徹頭徹尾敵対視した事は容易に理解出来ることである。彼等はあらゆる恐ろしい大罪を演劇は見せるものだと考え、けばけばしい衣裳を着て女装した男優が登場する事自体も又悪の腐敗した姿であると考えた。然し、前述した如く、puritan が此の様な考え方を持つていても、女王が演劇を認め、London Council とか市長が puritan でなかつたので順次 drama は成長した。加うるに、武人でありながら当時の文学運動に大きな関心を寄せていた諸侯、特に封建貴族をも見逃さない事である。

以上、Renaissance 貴族、puritan の問題を主題としたが究極のところ、Marlowe の作品を通じて覚知する事は、Marlowe の意志に反して、やはり完全に封建文化の根底から脱皮出来ず、古典悲劇、或は中世期の神秘劇、教訓劇の形態を保持しつつ、一方に於ては、Renaissance 的な一般庶民の意志を採用しつつ、古い劇的約束を徐々に崩壊させて行つたと言ひ得る。

若し彼が短命でなかつたなら、“Edward II”から益々彼独自の思索が向上し、Shakespeare 以

前は勿論の事、Shakespeare の時代に於ても最高の劇作家に成り得た事は何人も疑う余地の無いところである。Shakespeare がかくも有名に成り得た理由には、勿論才能という重大な要素が考えられるが、順次時代が彼等を要求していたという動かし難い事実も又見逃してはならないと思う。即ち、Edward Alleyn の出現、貴族と共に一般大衆が劇場を支持し始めた事、そして、其の平土間の観客への敏感な順応が、既に進行しつつあつた古い劇的形態の崩壊の過程にいやが上にも拍車をかけずにはおこなかつた事、更に、社会的注目を牽いた科学的諸発明等々の外的条件である。であるから、再度言える事は、若し Shakespeare が若死し、Marlowe が長生を得たと仮定すると、時代は前者に要求したものを後者に要求したであろうという事である。

## 3

“Tamburlaine The Great” は英国劇史上に一大進展を促した浪漫的悲劇であつて、Marlowe は前述した様な基礎の上に立ち、其の筋を Tamberlane に求めたのであつた。Tamberlane (1333?—1405) とは別称 Timūr であつて、アジア西半を征服し、サマルカンドに都して世界統一の大業を企てた蒙古の大征服者である。Spain の Pedro Mexia, Italy の Petrus Perondinus の旧記の英訳から取材した。然し、Tamburlaine の性格、征服慾、或は又妻の Zenocrate に対する特種な渴仰というものは、全く、彼独自の創作に他ならない<sup>29)</sup>。

此の作品の prologue に於て、彼は同時代の劇作家に対しては勿論の事、当時現存していた演劇的伝統に対して、その打破を目標とし、一大宣言を發した事前述の通りである。若し彼の文学的特質という問題が生じた場合、皆此の宣言の中に含有されていると言つても過言ではない。高慢な彼の性格が此の宣言を生み出し、其の結果敵を多く醸したのかも知れないが、此の事実は必然的結果生じたものである。即ち、脱皮すべき時期が到来したのである。

其の Prologue とは次の如き内容である。

From jiggling veins of riming mother wits,  
And such conceits as clownage keeps in pay,  
Well lead you to the stately tent of war,  
Where you shall hear the Scythian Tamburlaine  
Threatening the world with high astounding terms  
And scourging Kingdoms with his conquering sword.  
View but his picture in this tragic glass,  
And then applaud his fortune as you please.

即ち、「歌は歌つても親譲りの才能しかない輩の跳ね飛び踊りの気分や、田舎者なら金を出してやる様なうぬぼれた思い付きなどから脱皮して、これから皆様を雄大な戰鬥の幕舎に御案内致しますよう。そこにはスキト人のタンバレンが胆をつぶす様ななどえらい言葉を使いながら此の世を威嚇しており、無敵の劍を持って諸王を苦しめているのを聞く事が出来るでしょう。此の悲劇の亀鑑の中に登場する主人公をよく御覧になりまして、若し御氣に召しましたら、彼の諸々の運に対して、拍手御かつさいを御願ひ致します」という意味に訳し得ると思う。此の様な筆法は、直後に創作した Dr. Faustus の中にも Chorus という形式をとつて登場して来ている。

Only this, gentlemen, —we must perform  
The form of Faustus' fortunes, good or bad ;  
To patient judgement we appeal our plaud,  
And Speak for Faustus in his infancy<sup>30)</sup>

Prologue に於ける最後の行は特別注目に値するものではない、但し、fortune という語を両方に使用している事に注意すべきである。

重要な個所は前半にあつて、これが宣言の主旨である事は言う迄もない事である。更に此の重要な個所を詮索すると2つあつて、これが彼の作品全体を批評する場合の焦点ともなり、彼の大きな特質であるとも言ひ得る。即ち jiggling veins と such conceits. 換言すると、Blank Verse の問題と Tragical Conceit の問題である。前者は、今迄のジグ踊りの様な騒々しい<sup>31)</sup>Veins を非難しており、後者は軽薄な Conceits を非難している。軽薄な Conceits とは Comedy を指していると考えられ、例え悲劇であつても亡霊が椅子に坐つて終始劇を見ている様な<sup>32)</sup>ものは悲劇と考えずより雄大な、より厳肅な悲劇を推挙していると考えられる。

彼は此の“Tamburlaine The Great”が悲劇の亀鑑であると大言豪語し、其の為の重要な要素として heroic actions 及び high astounding terms を選出し、活用しようと試みた次第である<sup>33)</sup>。Part II にも Prologue が附随しているが、これはさして重要な意義を持つてゐるとは思われない。理由は、其の内容もそうであるが、此の Part II の創作自体が問題だからである。即ち、Part I が余りにも有名になつたので急速に続篇を創作した様に考えられる。Part I の終りに於て Tamburlaine は全世界と休戦する<sup>34)</sup>と言つて余音を残し、実は此の休戦は真の平和ではなかつたとして後篇に持ち込むといつた構成法をとつてゐるからである。

Part II に於ても同様な事が言えるが、Part I に於ては high astounding terms を使用して、殺戮、裏切り、慾望、それも16世紀に於ては有罪と誰しも認めるが如き様々な野心的慾望が展開されている。其の間、humour が入り込む一寸の際も見せていない。此の様に考えてゆくと、此の作品自体、何故悲劇と呼ばれなければならないのか大きな疑問が生ずる。「野望劇」或は「流血劇」と言うべき素質を充分持つてゐる様に思われる。悲劇としての論考は、此の度、除外して、Blank Verse に関する Marlowe の業績に就いて考察してみる。

此の件に就き、U. M. Ellis-Fermor 教授は、The play (Tamburlaine The Great) is the first of its kinds to use blank verse for the popular drama.<sup>35)</sup>と述べられ、具体的説明が無い。更に又、頭書に述べた如く、Jespersen が「……Marlowe が無韻の詩形(即ち blank verse)で之を広めて以来……」<sup>36)</sup>と述べておられるが、同様に具体的書述がない。

一般に、Blank Verse は「“Gorboduc” 以来の劇は end-stopped で生硬、単調なものであつたが、Marlowe の筆によつて、その drumming decasyllabon を脱し、pause が自由になり、且つ enjambement (run-on-verse) が使用せられる様になつた」<sup>37)</sup>と考えられている。

其処で、更に、一步進めて、其の手段、方法、及び其の成果に就いて考察を進めてみる。

Blank Verse は“Gorboduc”に於て始めて使用されたのではなく、遠く、Henry Howard, Earl of Surry (? 1517—47) の詩の中に発見出来る。彼は Italian Writers から借用し、Aeneid を翻譯する際に始めて使用した。

W. resteth here, that quick could never rest ;  
Whose heavenly gifts, increased by disdain,  
And virtue sank the deeper in his breast ;  
Such profit he by envy could obtain.  
A head where wisdom mysteries did frame ;<sup>38)</sup>

此の Blank Verse は 1547年以前に創作されたものである。更に、1562年 Elizabeth 女王の臨場を得て上演されたというその“Gorboduc”の一部を引用すると、

Our native land, our country, that contains

Our wives, children, kindred, ourselves, and all.<sup>39)</sup>

此の二つを比較すると容易に分る事は、一本調子で、退屈であるという事である。然し、“Tamburlaine The Great”が上演される迄には、これから40年に近い歳月が流れているという事に注目せねばならない。此の間、此の無韻五歩格 Iambic の詩形は、1 line に5つの stress を保持しつつ、機械的に創作され、聞く者をして jiggling veins の感を与えながら代々の劇作家の模範型式となつて来たのである。そこで、始めて Marlowe は彼特有の mighty line 或は又、high astounding terms にする為には、此の様な弱々しい変化のないものであつては効果が無いと考へた。その結果如何なる手段を選んだのかは問題となつて来る。単なる豪語のみを羅列しただけであろうか。当時生存していなかつた我々にとつて断を下す事は不可能な事である。然し、現在残されている作品から推定判断する事は可能である。結局下記の如き事項が生れて来た。

1) 今迄の jiggling veins なるものは強弱強弱の連続なので、これに変化を与えるために、Stress (強度) に5段位を認めた。即ち、5 = 最強、4 = 強、3 = 半ば強、2 = 半ば弱、1 = 弱とする。此の様にすると jiggling veins は避けられる。例えば強弱の単なる羅列ならば、4 1 4 1 4 1 ……或は 3 2 3 2 ……となる。

Tamburlaine, Dr. Faustus と順次 Marlowe の劇に登場した Alleyn の発声法は此の様な単調なものだとは考へられない。力強い変化のあるそれであると考えられる。<sup>40)</sup>即ち、1 から5迄自由に意味内容を中心にして発声されたのである。

2) 口調を良くする為、同一語の中に三音節が含まれている場合、4 3 1 或は 4 2 1 とせず 4 1 2 とした。4 3 1、4 2 1 式はドイツ語等に於ては甚だ多いが<sup>41)</sup>、例えば Tamburlaine を例に挙げると 4 3 1 より 4 1 2 の方がより強靱な感覚を与える。

3) 個有名詞、或は他の重要な語が特に力を入れて発音される。更に平凡な散文に於て用いられた場合よりも、より以上に line の第二音節に stress を加えて発音する。

4) line の頭書の用語には syllable の少ないものを使用する。ex. To, All, And, etc.

5) 俳優が最も操作し易い様に、1 line を 10 syllables の長さにして、平均3つの stress を持たせた事。

6) 形容詞役分詞を多く使用し、修飾される noun を4或は5として、其の adjective を3として -ing の効果を狙つた。例えば、前述した prologue の中にだけでも此の様な分詞が6つも使用されている。即ち、jiggling veins, riming mother wits, threatening the world, astounding terms, scourging Kingdoms, conquering sword 等である。勿論、形容詞役分詞と言つたがこの分詞が形容詞以外の他の役をつとめている場合もある。ing-form と言つた方が適切かも知れない。

今、5) で 1 line に3つの stress を置くと述べたが、此の数は平均数であつて、4も、場合によつては5もある事は勿論である。3 stress の一例を挙げてみると、

x ▼ x x x ▼ x ▼ x x  
To follow me to fair Persepolis.<sup>42)</sup>

x ▼ x ▼ x x x ▼ x x  
To see the slaughter of our enemies.<sup>43)</sup>

4 stress の例を挙げると、

x ▼ x x ▼ x ▼ x x  
The roofs of gold and sun-bright palaces.<sup>44)</sup>

jiggling veins を避ける為、且つ又、意味を強める為には俳優が此の他に音の長短という要素を加えたであろうという事は容易に想像される事である。数年後に完成した“Edward II”に於ては、実に見事な 3 stress の詩形を表わしている。

▼  
 Base Fortune, now I see, that in thy wheel  
 There is a Point, to which when men aspire,  
 They tumble headlong down ; that point I touched  
 And Seeing there was no palace to mount up higher,  
 Why should I grieve at my decling fall ; 45)

Marlowe の “Mighty Line” とは実に此の事を指すのではないかと思う。此の影響を大きく受けた者として第一に挙げられるのは Tennyson で、例の Break, Break, Break, 此れは Anapest の Iambus 弱弱強格である。

× × ▼ × ▼ × ▼  
 And the state|ly ships| go on  
 × × ▼ × ▼ × × ▼  
 To their ha|ven un|der the hill ;  
 × ▼ × × ▼ × × ▼ × ▼  
 But O|for the touch| of the van|ished hand,  
 × × ▼ × × ▼ × × ▼  
 And the sound of a voice [that is still ! 46)

此の他に Idylls of the King, 或は又 Keat の Hyperion などが例挙される代表的作品である。

さて、真実 Marlowe が此の様な詩形を彼独自で創作したのであろうか。結論から言うと、彼は Kyd のそれから借用したのである。Kyd は Marlowe の如く宣言などはしなかつた。然し、彼の業績、彼の価値は現在のところ余り認められてはいないが、実に偉大なものがある<sup>47)</sup>。Kyd は Marlowe よりも 5 才年上であり、既に此の様な詩形を大衆演劇の中に使用している。3つの stress という問題に於て、“Spanish Tragedie” の中の次の様な会話が容易に我々の注目を引く。即ち、

Hier. And where's the Duke?

Ser. Yonder.

Hier. Euenso :—48)

或は又、

Lor. Ho, Pedringano.

Ped. Signior.

Lor. Vien qui presto.<sup>49)</sup>

となつて三名の者が 1 line になる様に発声し、各人 stress を 1 個ずつ持つている。同様な理論が適合される場所を挙げると、Ⅱ. V. 65, Ⅲ. I. 35, 36, Ⅲ, II, 53, 54, 55, 94, 97, 99, Ⅲ. IV. 50, 51, 52, 53, 54, Ⅲ. X. 96, 97, 98, Ⅲ. XI. 30, 57, 59, Ⅲ. XIII. 59, 60, 66, 124, 125, Ⅲ. IV. 116, 130, IV. I. 57, 74, 126, 192, 193, 等である。

又, Cast. Welcome, Hieronimo.

Lor. Welcome, Hieronimo.

Bal. Welcome, Hieronimo.

と三名の者が続けて発言している、此の三という数が問題になる数である。Kyd の作品を検討してみると概略 1) から 5)迄の各要素を具備している。故に、Earl of Surry から始まり、Thomas Norton, Thomas Sackvills を経て発達した Blank Verse は実に Kyd が完全なる Dramatic Blank Verse に仕上げたと言い得る。然しこゝで問題になるのは“Spanish Tragedy”と“Tamburlaine the Great”とどちらが先に創作されたかという事であろう。後者が先なら此の論及は根底から覆えされる事になる。

1565年10月26日、Kyd は Merchant Taylor's School に入学した<sup>50)</sup>。そして、1562年に“Gorboduc”が始めて Inner Temple Hall で上演されている<sup>51)</sup>。此の Merchant Taylor's School の校長 Mulcaster は演劇の奨励者で、自ら学生に演劇を指導し、古典劇に力を入れ、大学の Hall で之を公開した事は勿論の事<sup>52)</sup>、宮廷で Elizabeth 女王に Drama を御覧に入れた程であつた<sup>53)</sup>。従つて、演劇の愛好家 Kyd は既に“Gorboduc”の如き Drama は見ていたと考えられる。然し、残念な事に、此の入学した1565年から1589年迄の Kyd に関する資料が皆目不明なのである。だが此の1589年という年は Thomas Nashe が盟友 Robert Greene の Menaphone に序文を書いた年である<sup>54)</sup>。此の中で Nashe が Kyd の悪口を述べた事によつて、此の年以前に、既に、Ur-Hamlet と Spanish Tragedy、更に又「家長の哲学」が伊語で Kyd の手によつて完成し、出版されていたという事が明白となつている。それと同時に Kyd が今迄になかつた様な詩形を使用したという事も又表面化されたのである。即ち、「一体連中の様な海外に出たこともない凡くらがイタリヤ語の翻譯でこんな醜態をさらしても、それは少しも不思議ではない。何故なら極楽を地獄の中につきこんだり、この天球の間に生きていた間は、hexameter の助けをかりないでは天空の正しいリズム（或は広さ）を知らなかつた手合に一体何を期待することが出来よう<sup>55)</sup>。」と Nashe は Kyd の事を述べているところである。此の中でリズムという原語は measure となつている。Nashe は Kyd の詩形が變つているので rhythm と言わずに measure と言つている。更に、其の後“Sufficeth them to bodge vp a blank verse with ifs and ands”と言つている位であるから過去の慣例に拘泥している者にとつては、其の pattern を脱皮せんとしている Kyd の意図は全然察知する事は不可能であつたろう。

次に1581年に“Seneca his tenne Tragedies translated into English”（英訳セネカ十悲劇集）が出版されているから、結局、焦点をしぼつて行くと、“Spanish Tragedy”が書かれたのは1581年から1589年迄の間だと言う事になる。此の問題に就いて、Boas 教授は種々証拠を提出して、1585年から1587年の間に書かれたという見解をとられている<sup>56)</sup>。明白に Kyd の方が着手した時期は早かつたと考えられる。Marlowe が“Tamburlaine The Great”の中に“Faerie Queene”の文章を引用するのに如何に苦勞したか、又、自分独自の筆の如く見せ掛けるのに如何に苦勞したかは周知の通りである。大和資雄教授も此の様に「通俗劇に Blank Verse の詩形を巧みに用いた点で Kyd は Marlowe に先んじた」という見解をとられている<sup>57)</sup>。

以上の様に考えると、Marlowe の Blank Verse に対する考え方は根本的に動揺し、T. S. Eliot が言う様に<sup>58)</sup>、Marlowe とその Blank Verse に関する讚美の念は消失し、そのまゝ、それを Kyd に与えるのが正しいという結論になる。

Marlowe にとつて此の詩的要素を奪われる事は実に致命的な事である。何故なら「比喩的登場人物を出して New Drama を創作した事よりも、或は又、其の Dramatic Technique よりも、詩的要素が彼にとつては全部である<sup>59)</sup>」からである。

(1958. 9. 29)

## 註 解

- 1) "British Drama" by Allardyce Nicoll. p. 78.
- 2) "Shakespeare and the Stoicism of Seneca" in "Selected Essays" by T. S. Eliot. p. 133.
- 3) "John Ford" in "Selected Essays" by T. S. Eliot. p. 203.
- 4) "Note on Metre" in "Linguistica" by Otto Jespersen. p. 1.
- 5) Marlowe の最初の文学的作品は Ovid の Elegies, 及び Amores の翻訳である。此等の作品は Cambridge 在学中に完成している。死後出版。Swinburne が賞讃している事周知の通り。
- 6) "Christopher Marlowe" by F. S. Boas. p. 71.
- 7) "Arden of Feversham の作者" 竹内公基教授。「英文学研究」斎藤勇博士古稀祝賀論文集 p. 633.
- 3) "Christopher Marlowe" by F. S. Boas. p. 13.
- 9) Ibid. pp. 11-13.
- 10) "Shakespeare in London" by Marchette Chute. p. 69.
- 11) 「ファウスト伝説考」相倉俊三教授著。p. 115.
- 12) "Tamburlaine The Great." ed. by U. M. Ellis-Fermor. の Text 使用 p. 114. (Methuen & Co. Ltd. London)
- 13) "Doctor Faustus" ed. by F. S. Boas の Text 使用。(Methuen & Co. Ltd. London)
- 14) "Christopher Marlowe" by F. S. Boas. p. 111. 及び p. 243.
- 15) Edmond Spenser's "Faerie Queene." 外山定男教授。p. 377.
- 16) 「悲劇の誕生」第一巻ニイテエ作。p. 200.
- 17) "Tamburlaine The Geat" V iii 46-48 参照
- 18) "British Drama" by Allardyce Nicoll. p. 78.
- 19) "The Works of Thomas Kyd" by F. S. Boas. p. xiii.
- 20) "Tamburlaine The Great" ed. by U. M. Ellis-Fermor. の Text 使用。其の "The Prologue" 2行目より引用。
- 21) "The Spanish Tragedie" in "The Works of Thomas Kyd" by F. S. Boas. p. 34. First Passage of Additions を入れると Ⅱ. V. 110-112.
- 22) "Tamburlaine The Great" の The Prologue" より引用。
- 23) "The Man Who Was Shakespeare" by Calvin Hoffman. p. 63.
- 24) 「新劇の書」久保栄著。p. 163.
- 25) Edmond Spenser's "Faerie Queene" 外山定男教授著。第一巻。p. 384.
- 26) "The Man Who Was Shakespeare" by Calvin Hoffman. p. 61.
- 27) "Christopher Marlowe" by F. S. Boas. p. 173.
- 28) "Shakespeare of London" by Marchette Chute. p. 26.
- 29) Introduction in "Tamburlaine The Great" ed. by U. M. Ellis-Fermor. pp. 17-61.
- 30) "Doctor Faustus" ed. by F. S. Boas を Text に使用。Chorus 7-10.
- 31) "Illustrated History of English Literature" Vol. I. by A. C. Ward. p. 188.
- 32) "Spanish Tragedy" に於て、開幕と同時に Andria の亡霊と Revenge の精霊が登場するが、Chorus の役をつとめて終始舞台の横に居る。
- 33) "English Literary Criticism ; Renaissance. by J. W. H. Atkins. p. 242.
- 34) "Tamburlaine The Great" I. v. sc. II. 467.
- 35) "Tamburlaine The Great" ed. by U. M. Ellis-Fermor. p. 68.
- 36) "Note on Meter" in "Linguistica" by Otto Jespersen. p. 1.
- 37) 「英文学史」斎藤勇博士著。p. 106.
- 38) "The Literature of England" Vol. I. by George B. Woods, Homer A. Watt, & George K. Anderson. p. 314. "Of the Death of Sir [Thomas] W [yatt], Earl of Surrey."
- 39) "Gorboduc" V. ii. 260-1. Text ; "The Minor Elizabethan Drama "Vol. 1. Pre-Shakespearean Tragedies p. 49.
- 40) 「韻律論」Jespersen 著。清水護訳 p. 7 参照。
- 41) "Modern English, Grammer" by Jespersen I. 5. 45. 参照。
- 42) "Tamburlaine The Great" I. Ⅱ. V. 40.
- 43) Ibid. Ⅱ. Ⅲ. V. 57.
- 44) Ibid. I. Ⅳ. V. 62.
- 45) 「シエイクスピア序論」中西信太郎教授著。p. 228.
- 46) "The Literature of England" Vol. I. by George B. Woods, Homer A. Watt. & George K.

- Anderson, p. 1136.
- 47) "Thomas Kyd 作 Spanish Tragedy に於ける悲劇の重点" 拙稿, (北海道英語英文学第二号)
  - 48) "Spanish Tragedy" Act. III, sc. XIV, 116. in "The Works of Thomas Kyd" by F. S. Boas. p. 78.
  - 49) Ibid. II. I. 41.
  - 50) "The Works of Thomas Kyd" by F. S. Boas. p. xvii.
  - 51) "The Minor Elizabeth Drama" Vol. I. Tragedies. Everymans Lib. p. viii.
  - 52) "The Works of Thomas Kyd" by F. S. Boas. p. xvii.
  - 53) "Thomas Kyd" 西島正教授著. (英文学思潮). 青山学院大学英文学会, 第二十四号, 第二号三頁.
  - 54) "The Works of Thomas Kyd" by F. S. Boas. p. xxviii.
  - 55) "The Works of Thomas Nashe," ed. by R. B. McKerrow, Vol. III. p. 316. 訳文は西島正教授のそれを拝借させて頂きました.
  - 56) "The works of Thomas Kyd" by F. S. Boas p. xxix-xxx.
  - 57) 「英文学史」大和資雄著, p. 76.
  - 58) "Selected Essays" by T. S. Eliot, p. 118.
  - 59) "The Cambridge History of English Literature" Vol. V. "Marlowe and Kyd," p. 148.